

## 設立 70 周年記念式典・記念講演



### ご挨拶

盛岡市手をつなぐ育成会会長 長葭常紀

盛岡市手をつなぐ育成会が、昭和 29 年に結成されて以来、時代の変革の流れの中で名称を変えつつ知的障がい児者の社会参加と住み慣れた地域社会で豊かに暮らして行かれることを目標に、時々の課題と取り組みながらここに設立 70 周年を迎えることができましたことを、会員の皆様と共に心から慶びたいと存じます。

昨年 11 月に開催した「設立 70 周年記念式典・記念講演」並びに「第 49 回はたちを祝う会」に際しましては、盛岡市長様を始め、日頃、本会のためにご支援くださっている多くの方々から、ご祝辞と激励の言葉を賜り、心から御礼申し上げます。

私たちの育成会は 70 年前の昭和 29 年 3 月に「盛岡市精神薄弱者を守る会」として設立しました。当時は知的障害児を護る法律もなく、すべもない時代に、特殊学級（現特別支援学級）のある小学校の校長先生や先生方が「親も力を合わせてこの子らのために行政や市民に働きかけていかななくてはだめだ」と仰って数人の親から運動を開始したのです。

盛岡市総合福祉センターができて事務局を移すまで、事務局は学校が持ち回りで先生が受け持ってください、長い間支え育てていただきました。先生方から受けたこのご恩は伝えていかななくてはならないと考えています。

この 10 年の主なできごととしては、当会運営の「喫茶さわらび」がファーム仁王の施設外就労の場となったこと。次には全国障がい者スポーツ大会「希望郷いわて大会」に役員やスタッフ、本人は選手として関わったこと。そして障がいをもつ子の親が誰もが思う「親なきあと」について渡部伸氏を講師に『障がいのある子の「親なきあと」は「親あるあいだ」の準備』をテーマに研修会を開催したこと。その後は新型コロナの感染拡大により国民生活が大きく制限されたことから、「親亡き後の支援ハンドブック」や「親心の記録」、「親なき後をみんなで支える」という冊子を会員全員に配布し活動に換えるというまさに忍耐の時期でありました。その中でもその時々状況を判断し感染対策を十分に行いながら本人活動や茶話会を少しずつ進め今に繋がっています。

本会のこの 70 周年の節目に、これまで歩んできた道を振り返り、過去の歴史を心に刻みながらもこれからの活動のあり方を考えていく必要があります。これからの社会の流れや福祉制度の変化や情報をいち早くキャッチし、障がいのある人も安心・安全に暮らせる盛岡に力を合わせて進んでいきたいと思えます。

この度は、育成会の活動にこれまで長年にわたってご支援をしてくださった方々に感謝状を差し上げました。長年にわたり常任幹事であり親の相談や福祉の情報提供をくださっている工藤宏行様、本人活動での生け花やお茶をご指導してくださった亡き勝又アイ先生、そしてこれまで陰で長く支えてくださっている「野いちごの会」の吉田芽様には心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

最後に、この 10 年は半分は新型コロナウイルス感染に振り回され、国民の日常生活が 180 度変わらざるを得なかった時代であったと感じております。その中であって、変わらずご指導ご支援を下された盛岡市、盛岡市教育委員会、盛岡市社会福祉協議会、盛岡市特別支援教育研究会、関係福祉事業所、賛助会員の皆様に心から感謝申し上げます。今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

# 70周年記念式典・講演会

令和6年11月16日(土)、盛岡八幡宮参集殿において、盛岡市手をつなぐ育成会設立70周年記念式典、第49回はたちを祝う会が行われました。

当日は、盛岡市長をはじめ来賓、会員を合わせ60名程の出席をいただき、初めに70周年記念講演といたしまして内舘茂盛岡市長から「盛岡市の障がい福祉について」と題してお話ししていただきました。

感謝状は、長年に渡り育成会の活動を支えてくださった盛岡市基幹相談支援センター所長 工藤宏行様、華道・茶道教室講師 故 勝又アイ様、野いちごの会 吉田芽様の3名の方に贈呈しました。

これからの活動も見守っていただけたらと思います。ありがとうございました。



工藤宏行様

育成会の方々へ支えて、応援して頂いたと思っています。今後とも一緒に頑張っていければと思っています。ありがとうございました。



故 勝又アイ様 娘いずみ様

私たち親子は、お稽古を通していろいろな出会いを持たせていただき、大切にしていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。



吉田芽様

障がいを持つ子とその親の手助けになればと思い活動してきました。廃油で作った石けんを販売しています。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

# 記念講演「盛岡市の障がい福祉について」 ～共生社会の実現を目指して～ 盛岡市長 内館 茂 氏



当会設立 70 周年にあたり、内館茂盛岡市長より「盛岡市の障がい福祉について～共生社会の実現を目指して～」と題してご講演いただきました。本題に入る前に「現代のような答えのない時代だからこそ、様々な意見をよく聞き、みんなで話し合い、みんなで決めていきたい。そしてみんなで盛岡を作っていきたい。そのようなことを市長として大切にしていきたい。」と述べられました。

講演では、「障がいのある人もない人も相互に人格と個性を尊重しあう共生社会の実現」を基本目標として盛岡市の障がい者基本計画が作られており、その目標達成のための具体的施策や取り組みについてわかり易く説明していただきました。大切なことは、障がいの有無のみならずあらゆる「違い」を越えて相互に尊重し支え合い共に生きていく社会を実現することであり、そのために様々な取り組みに努力していきたい、という力強い言葉をいただくことができました。

最後に、市長ご自身のかつての経験から、困っている方や弱い立場にいる方の力になりたいという思いを強くして市長を目指したのだというエピソードも語っていただきました。

# 盛岡市手をつなぐ育成会70年のあゆみ

会の名称の移り変わり

- 昭和29年3月 「盛岡市精神薄弱者を守る会」設立
- 平成7年5月 「盛岡市知的障害者を守る会」に名称変更
- 平成17年5月 「盛岡市手をつなぐ育成会」に名称変更

## 昭和二十九年～昭和三十八年 創設

- ・特殊学級増設運動 ・中学校卒業後の施設設置運動—市立しいのみ学園開園

## 昭和三十九年～昭和四十八年 躍進

- ・研修・推進・介護の専門委員会設置 ・機関誌「さわらび」発刊
- ・市に対して通所授産施設設置運動展開
- ・会として無認可通所授産施設さわらび学園開園→重度含む総合施設さわらび福祉センターへ移行

## 昭和四十九年～昭和五十八年 発展

- ・運動により、市立の「ひまわり学園」「しらたき学園」開園—市社会福祉事業団に引き継ぐ
- ・第1回成人を祝う会開催（昭和51年） ・家庭教育学級開校（数年にわたる）
- ・市総合福祉センターに喫茶さわらびオープン（昭和55年）
- ・盛岡福祉作業所開所

## 昭和五十九年～平成五年 飛翔

- ・五障害者団体による作業所開所→社会福祉法人設立運動へ
- ・施設対策委員会設置—盛岡地区に高等部設置運動展開→後に県立盛岡高等養護学校となる

## 平成六年～平成十五年 探求

- ・しいのみホーム開設をはじめとして、あすなろ園開設に対し資金援助をおこなうと同時に各作業所支援

## 平成十六年～平成二十五年 変動

- ・本人活動「元気塾」スタート
- ・キャラバン隊 peer 結成—知的・発達障がい理解のための出前講座展開
- ・設立55周年記念として総合生活支援ノート「つなぎ手」作成・会員、他障害者団体に配布
- ・「盛岡市自立支援協議会」設置について盛岡市議会へ請願

## 平成二十六年～令和五年 忍耐

- ・喫茶「さわらび」でファーム仁王の施設外就労がスタート
- ・全国障害者スポーツ大会「希望郷いわて」が開催され役員・スタッフを派遣
- ・盛岡市長へ「旧盛岡競馬場跡地への障がい児者支援施設の整備について」要望書提出
- ・「親なきあととは親あるうちに」ということで、会員全員に冊子「親なき後の支援ハンドブック」「親心の記録」を配布
- ・令和2年からは、新型コロナウイルス感染拡大により会の事業・活動は中止や縮小を余儀なくされ忍耐の時期となる。その中においても、感染対策を十分行い本人活動をスタートさせる

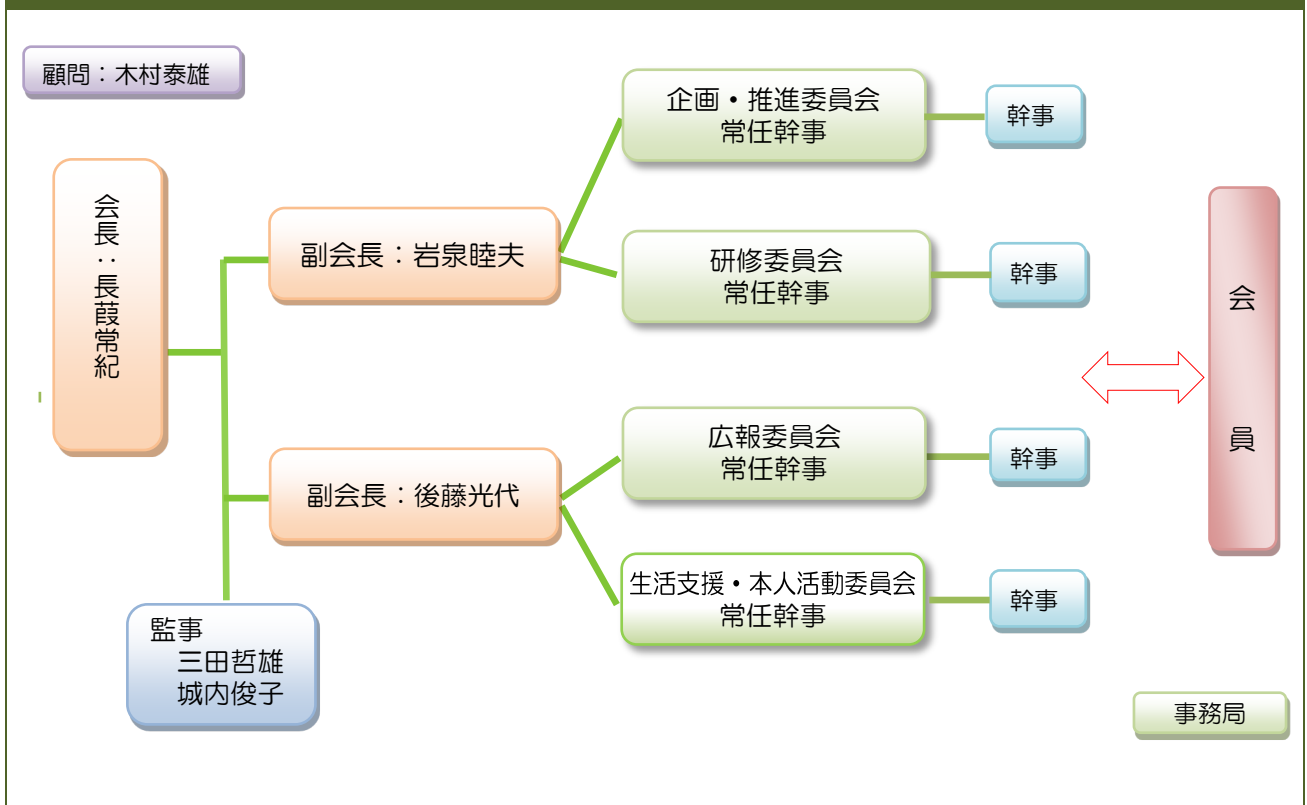
★長期にわたり盛岡市特別支援教育研究会の合同運動会、合同作品展、学習発表会等の行事への助成を実施

# 盛岡市手をつなぐ育成会 現役員一覧

## 平成26年度～10年間の役員名簿

平成26年度改選	会長	長 葎 常 紀	副会長	小野寺美喜子	溝口 澄子	佐藤 慶博
平成28年度改選	会長	長 葎 常 紀	副会長	佐藤 慶博	岩泉 睦夫	後藤 光代
平成30年度改選	会長	長 葎 常 紀	副会長	佐藤 慶博	岩泉 睦夫	後藤 光代
令和元年度改選	会長	長 葎 常 紀	副会長	佐藤 慶博	岩泉 睦夫	溝口 澄子
令和3年度改選	会長	長 葎 常 紀	副会長	佐藤 慶博	岩泉 睦夫	溝口 澄子
令和5年度改選	会長	長 葎 常 紀	副会長	岩泉 睦夫	後藤 光代	

## 令和6年度 盛岡市手をつなぐ育成会組織体制



## 『さわらび』の由来

『さわらび』の由来について、故 小野隆祥さん（五代会長）が機関誌「さわらび」第5号に書いておられますので抜粋してお知らせします。

いはばしるたるみの上のさわらびの もえいづる春になりけるかも

この歌は、万葉集巻の第八の巻首「春の雑歌」の有名な『さわらび』の歌である。

「さわらび」の「さ」は接頭語で特別の意味はなく、いくらかやさしさの気持をそえるだけで「さわらび」の場合は昔から「早蕨」と書くので、いかにもわかかわかしい「わらび」の感じがしてくる。

すくすくと伸びていく生命力のシンボルが「さわらび」なのだといってよい。

私達の子供等がすくすくと成長して行ってほしいという願いで、毎日一喜一憂しながら過ごしているとき、希望、勇気を与えてくれるのが「さわらび」であると思う。

## 「さわらび」と「守る会（現手をつなぐ育成会）」との関係

昭和40年「守る会」機関誌の名称を会員に公募、次の五つ（しゃくなげ、わらび、さざんか、不来方、さわらび）にしぼられ、役員会で検討した結果、当時の「しいのみ学園」の菊池園長の提案した「さわらび」に決定。12月に機関誌「さわらび」第1号が発行。

### 🐣 編集後記 🐣

障がいある方々が地域の皆さんと共に幸せに、楽しく暮らしていけるようにと願うとともに、設立70周年という長い歴史に立ち止まることなく、活動していきたいと思えます。引き続き、ご理解ご協力をよろしくお願い致します。

編集にご協力くださった皆様、ありがとうございました。

広報委員会